

# 老 い に つ い て

(円 空 仏)

小田垣雅也

七十六、七才くらいの女の人が、スケートでフィギュアをするのだそうで、わたしは「どういう結果になるか」と思い、そのテレビを消さないで見ていた。これはフザケ番組ではない。そしてそれは惨憺たるものであった。第一、足もよくあがらない女性が、どうやって足をあげると言うのか。それに、足そのものが美しくはない。だいたい回転もろくにできないその人が、

どうやって回転するのか、ということからして問題である。

スポーツには生の躍動というか、命の生气とかが、どうしてもある。フィギュアにはフィギュアとしての年齢の若さが前提されている。相撲は、三十いくつになると、もう老境に入ったとされるそうだ。若さそのものが美しいのである。命を前提としたスポーツは、他にもいろいろある。そうしてのみ、それはスポーツでありうる。わたしは一日（実業団）、二日、三日（大学・箱根駅伝）を続けて見ていた。

美とは、この場合、もしそうありたいとする心根があるなら、自分の年齢を考えたほうがよい。美しくありたいという思いを

放棄すること、そのような思い切りの良さが、美しくありたいというその心根を救うだろう。老人用に美学というのは、他にいくらでもある。

スポーツの場合、美しくありたいとする気持ちを放棄することが、美しくあることを救う。根本的な心根が目指している「当のこと」、それを諦めることが大事だ、という主体的矛盾は、わたしたちが生きていくにあたっての矛盾だ。その矛盾に耐えることが、スポーツをスポーツたらしめている。

その意味での生の躍動なしには、スポーツはスポーツではありえない。わたしはマラソンなどを走っている選手たちの顔を

見ていることがよくあるが、そのわたしの心理の底には、このスポーツによって、生の躍動を感じているのである。これは現在では良く知られていることだが、古代オリンピックの選手たちはみな裸だったそうだ。

円空という禅僧がいる(1632-1695)。あの本質は省略だろう。もともと円空仏は、すべてを捨て去ることから始める。わたしは、円空仏は「もっともよく分かる者の一人」だと思うが、あるとき小金井の家の修理をしていて、大工の一人が、「家には円空仏がある」と言った。持ってきてもらって見てみると、それ

は円空仏であった。あれは省略の美だ。捨てて々々、それ以上捨てられない、というところに円空仏の現実はある。それはまた、禪の無に通じていよう。

「省略の美」というような意識を捨て去ること、そのことが本当の省略で、この最も大事なもの、円空仏で言えば、仏性というものの必然を現すことが、円空が仏を彫る本性だろう。その「当のもの」を捨て去ることが、円空仏の目的である。しかしそれをも捨て去ること、「すべて」とは、そういう風にして現われるものだ。「当のもの」を捨て去ること、それが、その円空仏が本物であるかどうか、の分かれ目だ。わたしは先に、「円空

仏は良くわかる者だ」と言ったが、それはその捨象が本物であるかどうか分かる、ということである。それ以外の根拠はない。

道理で円空は、旅の途中で、手近かにある薪とかその他で直ちに仏像を刻んで、それを宿賃にしたということである。大仰ではない。だから、その大工の何代目かの先祖が、円空仏の一つを持ちうることは、考えられないことではないのである。円空は生涯に一二万体の仏像を作ったそうだ。惜しいことに、その像（大工が持ってきた像）には、何かニスのようなものが半身に塗ってあったが。

これはいつかも書いたことがあるが、西洋の彫刻の特徴は、その「微に入り、細に涉った」彫刻が、円空の省略の美学とは別の次元にあるということである。その事実には打たれた経験が、わたしにはある。西洋彫刻には、真理に対する人間の「反抗」がある。そこには反抗の気配が確かにある。それは「すべて」に対して、たとえば、自分の老いの醜さに対して、「すべてに恭順する」という円空のような気配がない。ただ西洋彫刻には、目前の美に形を与えようとしている。円空仏には、自分の「老いの醜さ」をも受容するといった、省略の美学がある。それが

円空仏を円空仏であらしめている。

「反抗」がなければ相手はよく分からない。円空仏についても、それを後に残したという事実は、一つの「妥協」である。尤も、円空自身は、そういう人気のもちようを脱しているのかもしれないが。それもわたしが、円空が気に入っている理由だ。西洋の彫刻はその「反抗」によって、と同時にその恭順によって、つまりそのバランスによって、分かるのではないか。むしろ西洋美術のその「恭順」によって、わたしはその反抗の美学に打たれたのだ。どうせ人間には、どんなに微細にわたってそ



れを表現しようとしたところで、人間が「敗北」すること以上はできない。その「微に入り細に涉った」反抗の熾烈さによって、人間はその空しさに打ちすえられるのが西洋彫刻ではないのか。ミケラジェロを見ても、ラファエロを見ても、その人間の敗北にわたしは打たれる。または中世の教会の内部装飾の、それこそ微に入り細に涉った飾りを見てもそうだ。なぜなら、そこに人間の「敗北」を見るからである。その「敗北」の熾烈さを通して、人間の強力さを見るからだ。西洋の寺院を回りながら、わたしはそのことに打たれていた。円空仏とは逆である。

円空仏はサッパリしている。一彫の目もとに、仏の悟りがある。大昔、『美酒について』という本を読んだ。吉行淳之介と開高健の、三回にわたる座談会の手記であったが、その中で開高が、「イロの道と言うのは、そのイロの道ができなくなったら、どうするのですか」と問うたのに対して、吉行が一言のもとに、「それもイロの道」と答えたのを読んで、わたしは感服したことがある（これはむかし書いた。むかし考えたことは、そのまま覚えている）。老いが醜いのは、老いの風姿のうちだ。

しかし醜くなくて美しいだけなのは、一面的であろう。美と醜は拮抗している。美はむしろ、美の消滅の中にこそあるとは

言えまいか。桜の花吹雪の中にあるのは、そういう美だ。認めることの前提は、それを現実とすることだ。現実化できない承認は、それだけで現実を失っている。このように言うと、わたしが理想主義者（イデオロジスト）だ、と言われそうだが——。「それもイロの道」という吉行の言明も、そのことを物語っている。

一番最初にあげた女の人も、彼女にとっての美を諦めることが大切である。それは「すべて」を諦めることに繋がっている。しかしそうしてのみ、美が救えるのではないか。彼女の美学を

諦めること、しかしその潔さによって、彼女自身の美的生活を、彼女自身の生きている感動を、表出することができるのではないか。たぶん、それのみが許されている。

わたしも今年八十一歳になる。そして思う。「美的生活を諦めることが、残された、真に美的な生活だ」と。それが「永遠」の、同時にまた「反抗」の意味だと。恭順と滅亡、それがたぶん、美のあり方なのである。